

「子どもにとって遊びは大切な」ということは、どなたも納得される話だと思います。しかし、なぜ、どのように、大切なのかということについては、なかなか説明できない方が多いのではないかと思います。私は椎葉に来て、久しぶりに「休みの日や昼休み・放課後等に、子ども達(異学年)が集まって外遊びに興じる」光景を目にしました。少子化が進む中ですが、私たち大人は「遊びの価値」を再構築して、子ども達を見守っていくべきではないかと考えています。

遊びの中で自分を見つける

以下は、『子どもへのまなざし』(児童精神科医佐々木正美著 福音館書店発行)からの抜粋です。

子ども達は、仲間といっしょに遊ぶようになると、まずルールをつくる、必ず規則をつくります。そして、その規則を守れる子どもだけが、原則として遊びに参加する資格がある、子ども達のいろいろな遊びをみているとそう思います。そして、次に役割を分担し合う。どんな遊びにも全く同じ役割というものではなくて、みんなにそれぞれの役割があるのです。さらに、それぞれが何かの役割をするときには、自分はこの役割をやるぞということで、仲間の承認を得なければなりません。仲間の承認を得て、はじめてその役割を演じることになるわけです。

みんなで規則をつくり、規則を守り、仲間の承認を得てから役割を演じ、そして、みんながその役割に伴う責任を果たし合う。そうすることが遊びなのです。そして、自分の行動が、みんなから期待されている行動になっているのかどうかということも、子ども達は自分で自分をチェックしながら、その範囲で自分が思いきりやりたいことを、やりたいようにふるまうのです。子どもは、仲間といっしょに遊ぶということは、自分がやりたいことは何か、しかし、どこまでは抑制しなければいけないのか、がまんしなければいけないのか、制限しなければいけないのかということも、ちゃんとわきまえることであるということを知っているのです。

子ども達は遊びの中で、そういう機能や能力を身に付けていくのです。しかも、そういう力を習得していく過程が、遊びの喜びでもあるのです。大人の場合は、魚釣りやゴルフの腕前が上達していくプロセスが楽しい、ということでしょうか。ですから、遊びの中で規則が厳しくなればなるほど、役割が困難になればなるほど、遊びは緊張に満ちてきます。しかし、この緊張の大きさが遊びの感動の大きさに比例するのです。だから、緊張のない遊びというのは感動も小さい、あるいは感動もない、遊びというのはそういうものなのだと思います。ビョツキー(※)が結論的にいっていることは、「おそらく、人間が成長していく過程で、倫理観とか、道徳観とか、社会的な役割とかいう、社会的な人格を成長させていくプロセスには、幼児期から小学校の低学年にかけてのこういう遊びは、不可欠な要件だろう」と、こういうことではないかと思います。

(※ビョツキー：ロシアの発達心理学者)

昔は、さまざまな年齢の子ども達が、原っぱや路地などで集まって遊んでいました。そこは、大人に干渉されない子ども達だけの世界、子ども同士で遊びのルールをつくり守り合う世界でした。(大人の目からすれば)いいことも悪いことも教え合う空間でもありました。子どもにとって大切なことは、「勉強の前に、友達と遊ぶことが十分にできるようになっていなければ、結局、社会人になっていけないということ」と思います。

小学校の時期に大事なこと

アメリカの発達心理学者エリクソン(アイデンティティ：自我同一性の提唱者)は、「将来、人が勤勉に生きていくための基盤ができるのは小学校時代である。勤勉に生きていくということは、社会が長い年月をかけて創り上げてきた文化を、社会の構成員同士で、互いに分かち合うことに誇りを抱き合うことだ。」と述べています。噛み砕きますと、人間の社会的な勤勉性の基盤は、小学生の頃に、友達から学ぶこと、友達に教えることによって育つと言っているのです。



さらに、エリクソンは、重要なことは、互いに学んだり教えたりする「内容」であり、それは「質よりは量」だとも言っています。大人の顔や価値観で考えるような、りっぱなことばかりではなく、昆虫の飼いか、魚の釣り方、竹馬の乗り方など、日常生活に落とし込まれた様々な文化や風習(子ども達の興味の範囲にあるもの)こそ良い。なぜなら、親や先生そのほかの大人から学ぶこと以上に、友達からものを学ぶ、友達にものを教えることが大切だから。友達の会話の中に入っていく、友達と遊びや少年団などの活動に熱中することが小学校の時期に大事なことで述べています。私たち大人は、大人から学ぶことの方を過大評価しすぎて、子どもの仲間同士で教え合うことはろくなことではない、あるいはたいしたことではないと知らず知らずに軽視しているところがあるのではないのでしょうか。

今や大きな教育問題となっている「不登校」の子どもの中には、自分の考えや自分の気持ちを自由に表現することができない子ども、コミュニケーションが上手いできない子ども、人との交わりに怖れやストレス、苦痛を感じる子どもが少なくありません。これは、幼少期からの仲間との遊び、関わり合いの不足が大きな要因であると指摘されています。

前提は「人を信頼できること」

左記の佐々木氏は、乳幼児期の子育てこそが、人格の基礎をつくる上で最も重要であると述べています。氏曰く「人格の基礎」とは、「人を信頼できること」。人を信頼できるから、人と関わることを望み、ひいては自分自身を信じることができるようになる。

では、乳幼児期の子どもに、どのようにして「人を信頼できる感性」を育てていくのでしょうか?

それは、「自分の望みを、親やまわりの人から十分に満たしてもらえたという実感が必要である。」と氏は述べています。本当に相手を信じる力が育つのは、自分でそのことをしたいのに、自分ではその能力がなくてできないというときに、だれかにやってもらうということ。例えて言うならば、乳児は自分の望みは人の手を借りなければ叶えることができません。ですから乳児が自分でできる努力は立くことだけです。泣いて手をかけさせる赤ちゃんは育てにくい子だと思ってしまうかもしれません。泣かない子は、(この人には頼れない、泣いたって無駄だ。)と自立心を失わせることに繋がります。子育ては終わってしまえば、あっという間。その時期はもう二度とやってきません。

